

左右ポピュリズムの共通の根源
ーニューレフト運動の考察からー

1A193008-2 アンダーランド ジェイク

はじめに

イギリスの EU 離脱、米国におけるトランプ大統領の当選、ヨーロッパ各地での極右勢力の躍進など、現在の世界はポピュリズムの拡大により揺れ動いている。各地で社会に亀裂が生じ、左右の対立が深化している。このような現代の世界情勢は、左右のポピュリズムを改めて検討するよい機会である。本論文では、1950年代以降に先進国間で流行したニューレフト運動に着目する。具体的には、日本の政治学者である水島治郎が『ポピュリズムとは何かー民主主義の敵か、改革の希望か』（2016年、中公新書）の中で提示するポピュリズムの定義を援用し、ニューレフト運動をポピュリズム運動として捉え、分析する。また、近年興隆している右翼ポピュリズムとニューレフトの左翼ポピュリズムの類似性を挙げ、異なるイデオロギーに基づくポピュリズム運動であるこの二者が共通の根源を持っているという仮説を提示する。その方法としては、ピッパ・ノリスが右翼ポピュリズムを説明するのに用いた「文化的反発説」(“cultural backlash theory”, Pippa Norris and Ronald Inglehart, 2016) でニューレフトの左翼ポピュリズムの発生も説明することができることを示す。

ニューレフト運動は幅の広い運動であり、その内に多くの個別な政治運動を含む。その全てを分析対象とすることは困難である。本論文ではニューレフト運動の思想全体を取り上げながら、運動の具体的な経緯を論じるのはアメリカ合衆国にとどめる。

第一節では、まずニューレフトの概況と発生の背景について触れ、その後ニューレフトの諸運動の根底のイデオロギー的共通性に言及し、思想としてのニューレフトを分析する。そして、ニューレフト運動の基幹にある思想自体が、諸々の運動の実際的な展開やプラクシスとは関係なく、ポピュリズム思想と共通していることを示す。第二節では、ニューレフト運動の具体的な例としてアメリカを取りあげる。アメリカでは1950年代からニューレフト運動が展開されたが、この運動と「人民」の関係を中心に見ていきながらニューレフト運動がポピュリズム運動であることを実例を用いて示す。

続いて第三節では、近年の右翼ポピュリズムの流行を説明するためにノリスとイングルハートが立てた「文化的反発説」(Norris and Inglehart, 2016)を説明し、左翼ポピュリズムの発生も同説により説明できることを示す。それにより、右翼ポピュリズムと左翼ポピュリズムが共通の根源を持っているという結論を導く。最後に、論の大まかな展開を振り返り、結論を再確認するとともに、こんにちの左右両極のポピュリズムの対立について筆者の思いを述べる。

1. ニューレフトとは

ニューレフト運動は 1950 年代以降に始まり、主に 60 年代から 70 年代にかけて先進国を中心に流行した政治運動である。その内容は、西洋の資本主義社会と東欧の共産主義社会の双方を批判し、市民権や参政権、女性の権利、性的少数者の権利など、幅広い社会問題を取り上げて人権を主張するものであった。ニューレフトといえども各地で異なる主張を展開し、異なる軌跡を辿ったので、一概に定義することは困難である。しかし、運動の多くは一定の共通な価値観や特徴を有しており、ニューレフト全体に緩やかな同質性が存在することは確かである。政治学者の大嶽秀夫は、ニューレフトを次のように定義している：

歴史的にいえば新左翼¹（New Left, nouvelle gauche, neue Linke）とは、社会民主主義（アメリカの場合は民主党リベラリズム）とスターリン主義の双方を批判しつつ、かつ自らを『真の』左翼と自認し、社会主義ないしはリベラリズムの刷新を求めて…＜中略＞…登場した、①思想、②政治運動、そしてその両者と密接な関連を持つ③文化運動・文化現象の総称である。（大嶽、2007：13）

本論文では大嶽秀夫による上の定義を採用する。また、特にニューレフトの政治運動としての側面に注目して論じるとき、ニューレフト運動と記す。

ニューレフトの持つ特徴の一つとして、社会民主主義とスターリン主義などの既成左翼を含む体制の批判がある。ニューレフトの理論的支柱を形成した思想家の著作を見ると、それが鋭い体制批判と現行社会の否定に決定づけられることがわかる（Mills, 1956；Thompson, 1959；Marcuse, 1964；Debord, 1967）。こうした体制批判の中でニューレフトはしばしば「人民」の立場に立ち（大嶽、2007：18）、「人民」の声を代表する真の左翼を自認する（大嶽、2007：13）²。このような既成左翼を含む体制への批判と、体制に抑圧されている「人民」の擁護には、次のような背景がある。

新左翼運動の萌芽した 50 年代以降は、戦争が終わって経済的繁栄を遂げた先進各国が、前例を見ない物質的な豊かさを迎えた時期であった。新左翼運動の中心になった学生たちは、こういった物質的充足の中で育ち、以前の世代に見られる経済成長と安定を最重要視する価値観とは対照的な、「脱物質主義的価値観」（Inglehart, 1977: 28-33）を身につけたと考えられる。経済的豊かさとそれを支える資本主義を支持する右翼や、労働者の経済状況の向上を主眼に置き、その理論の根本部分を経済においていた既成左翼はこの世代の価値観を政治に反映させることができなかった（大嶽、2007：13-14, 194-220）。このことが若い世代の中で政治との乖離意識を生み、政治不信と体制への反発を招いたと考えられる。また、新左翼は特に既成左翼に激烈な批判を加えたが、その理由として当時の左翼の没落の有様が挙げられ

¹ 本論文ではニューレフトと新左翼の二語は同義であるとして互換的に使用する。

² 例えばトムソンが自著 *The Making of the English Working Class* で用いた、実際の労働者の生活の記録を中心にした分析手法（日本では柳田国男が提唱した民俗学の分析手法がこれに近い）には、当時の新左翼が重視した「人民」と寄り添う姿勢が代表されている。

る。1950年代末までには先進国間で左翼が社会主義の実現を通して目標としていた政府による経済管理と福祉の誕生が資本主義社会で実現した。また、大量消費社会の到来は大部分の国民が失業や貧困から解放されたことを意味し、豊かな社会における労働者の左翼支持が弱まった（大嶽、2007: 13-14）。加えて、この時期に起こったフルシチョフによるスターリン批判やハンガリー事件は東欧の社会主義、共産主義国家の政治的抑圧と人権侵害を明らかにした（Michael, 1995: 15, 168）（Lynd, 1969: 65）。アメリカやイギリスをはじめとする各国の共産党はこの二つの事件に対して曖昧な反応を取り、これらが起きた1956年を機に多くの人が既成左翼には見切りをつけて批判の側に回った。かくして先進国で既成左翼は権威を失墜し、代わりに「真の左翼」を自認し、人民の味方を主張するニューレフトが各地で台頭したのである。

以上、ニューレフト運動の概況と思想、さらに発生の背景について論じてきた。以下、ニューレフトがその根本的な思想においてポピュリズムと共通していることを実証的に説明する。ここで、水島治郎の用いるポピュリズムの定義を確認し、ニューレフト運動がそれに属することを以下の手順によって示す。まず、ニューレフトが「下」対「上」の構図の運動であることを述べ、次にニューレフトの指し示す「人民」が水島が設定するポピュリズムの「人民」の3条件を満たしていることを示し、最後にポピュリズムが強調する参加民主主義の理念をニューレフトも持っていることを示す。

まず、水島治郎が『ポピュリズムとは何か―民主主義の敵か、改革の希望か』で提唱したポピュリズムの定義と特徴を確認する。水島はポピュリズムを「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動であるとし、全ての既成政治やエリート層を「上」とすると、ポピュリズムはその「下」にいる一般大衆を代表してその主張の実現を目指すとした（水島、2016: 7-9）。このため、ポピュリストはまず一つの同質な「人民」を置き、この「人民」に対立する存在であるエリートや体制を批判し、「人民」の声を直接的に政治に反映させる直接民主主義的政治手法を重視する（同前: 9-11）。

この定義に則って考えると、今まで論じてきたニューレフトもポピュリズムとして解釈することができる。ニューレフトでは、体制や社会に抑圧されている被差別階級、弱者階級に寄り添い、それらを含んだ新世代を「人民」とし、その人民を代表して既成の政治勢力を批判する。これは、言うまでもなく「下」の大衆が「上」のエリートや体制を批判するポピュリズムの構図に当てはまる。その際、水島はポピュリズムの設定する「人民」が兼ね備えている特徴として次の3つを挙げている：

- (1)「人民」は「特権層」と対置される「普通の人々」である。
- (2)「人民」は「一体となった人民」であり、超党派的である。
- (3)「人民」は「われわれ人民」であり、同質的な特徴を共有する（同前: 10-11）。

まず、(1)に関しては、新左翼は少なくとも公式のイデオロギー上では社会的な弱者や労働者、被抑圧階級に寄り添う運動であった。非特権層の立場から特権層に批判を加えるのはニューレフト運動の中核をなしており、この点においてニューレフトの置く「人民」は(1)の特徴を持っていると言える。(2)に関しては、政治学者シリル・レヴィットは「早期のニューレフトの展開した批判は主に道徳的な議論の上に成り立っていたため、個々の成員のイデオロギーは重要視されなかった」と指摘している(Levitt, 1984, 筆者訳)。実際、ニューレフト運動の支持層は多様であり、初期にはキリスト教徒やトロツキイスト、後期にはネオマルクス主義者やマオ主義者がその主要部分を形成し、運動に呼応する一つの固定的なイデオロギーはなかった。また、ニューレフト運動の思想に大きく影響を与えたアメリカの社会学者のC・ライト・ミルズやハーバート・マルクーゼは、より科学的な思考方法として当時の知識人の間で強い支持を受けていた経験主義や実証主義に痛烈な批判を加え、多様で自由な形而上学的な理論の展開を促した(Mills, 1960)(Marcuse, 1964)。そのため、ニューレフト運動では様々な社会理論、経済理論が生まれ、それと後期の直接行動主義が合わさり、实际的な行動を後付け的に説明するような、直接行動に追随する形での理論構築が行われるようになり、後期の新左翼の問題点ともなった。これは、水島が挙げるポピュリズムの特徴の一つであるイデオロギー的な薄さとも繋がってくるが、要するに一貫したイデオロギーを有していなかったニューレフト運動は多様な人間の支持を受けることができたため、ニューレフト運動で措定される「人民」はポピュリズムの規定する「人民」の(2)の特徴も持っていると言えよう。

最後に、(3)の特徴であるが、一見すると新左翼の「人民」には欠けているもののように思える。なぜなら、新左翼運動は多様性を重んじ、これまで社会で抑圧されてきた少数者や弱者の階級を積極的に擁護し、その意見を政治に反映させることを目的にしていた運動であるからである。確かに、ニューレフト運動は思想上では非特権層や被抑圧層、弱者や少数者の立場に立って戦うものだった。しかし、数々の実証研究が明らかにしている通り、新左翼運動の最大の担い手となったのは、その展開するレトリックとは裏腹に、特権層である裕福な中間層の学生であった(Flacks and Mankoff, 1971:55-67; Conlin, 1982; Levitt, 1984: 6)。ニューレフト運動が起こるまでの時期は、先進国間で大学の設立が急速に進み、高等教育の拡充が進んだため、中間層以上の子供はこぞって大学へ進学した(Barker, 2008: 52; 大嶽、2007: 18)。こうして大学生となった特権層が、皮肉にも特権層を批判する新左翼運動の一番の担い手となったのだが、この不可思議な現象はのちにピッパ・ノリスの「文化的反発説」(Norris and Inglehart, 2016)との関連の中で説明する。

ここでは、多様性を謳う新左翼の想定した「人民」とは、表向きには労働者や非特権層を中心においていたが、実際には中間層に属する大学生がほとんどであり、そこに大学でのコスモポリタンの教育を受けたエリート層という同質性が存在することが見受けられる。つまり、新左翼運動を支えたものの多くは中間層の出身で、脱物質主義的な価値観を有する若い世代の一員であり、かつ大学などの特権的環境に身を置いてコスモポリタニズム、グローバリズムの意識を培ったものという点で同質である(Ignazi, 1992)。さらに言えば、彼らは表向きでは被抑圧者を代表

し、既存の体制への批判を柱に結集していた。つまり、体制に刃向かう弱者という表向きのアイデンティティにも同質性が認められる。このため、新左翼運動の「人民」はポピュリズム的な「人民」の(3)の条件も満たしていると考えられる。以上より、ニューレフトもポピュリズムと同様に「人民」を設定し、その「人民」の立場からエリート批判を展開することがわかった。

さらに、水島は、ポピュリズムでは「人民」の声を直接的に政治に反映させる直接民主主義的政治手法を重視するとする（水島、2016：9-10, 13-15, 131-133）が、ニューレフトの中にもこのような傾向はある。ニューレフトの決定的な特徴の一つとして既存の政治への不信や社会体制への疑心があるため、労働者や弱者などの「人民」が直接政治に影響力を行使できる参加民主主義の理念がニューレフトの思想の根本部分にある（大嶽、2007：15）（久米他、2011: 376）。これは、アメリカでの公民権運動やフェミニズム運動を始めとする、参政権と制度的差別撤廃を求める運動に見て取れる。このような運動の裏には「人民」の声を政治の舞台に届けようという意図がある。また、パリで起こった学生運動や5月革命の際にも、大学の運営と、さらには行政にまで直接的に「人民」の意見を反映させようという主張が展開された（大嶽、2007: 244;）。ニューレフトの理論家の中にサンジカリズムに似た主張を展開する者が多かったこともこのような直接民主主義重視の姿勢の反映であろう。そもそもニューレフトの抗議運動、非暴力運動、あるいは暴力運動の中で唱えられた直接行動主義も一種の直接民主的な政治手法である。ニューレフトの参加民主主義を強調する政治運動が、水島が自著の中で左翼ポピュリズムの例として取り上げているラディカルデモクラシーに影響を与えたことも指摘されている

（Dahlberg, 2012: 3-4；水島、2016: 18-20）。このことから、ニューレフトも直接民主主義的政治手法を重視し、「人民」の声を直接的に政治に反映させることを目的としていたことがわかる。

以上より、ニューレフト運動が、「人民」の立場から「人民」に対立する存在であるエリートや体制を批判し、「人民」の声を直接的に政治に反映させる直接民主主義的政治手法を重視するような運動であることがわかった。つまり、水島治郎の定義に従えば、ニューレフト運動はポピュリズム運動であると言える。次に、アメリカのニューレフト運動の具体的な展開を追って、それをポピュリズムとして解釈しながら分析する。

2. アメリカのニューレフト運動

アメリカで展開されたニューレフト運動の始まりは公民権運動にあった。それまでの左翼運動は労働者の地位を守ることなど、自己利益の追求が目的の運動がほとんどだった。しかし、公民権運動の登場により、自己利益とは離れた、「モラルの戦い」としての左翼運動が確立した。これが脱物質主義的な価値を重要視したニューレフトの始まりである。公民権運動の根源は黒人による権利主張の運動であった。ローザパークスの逮捕が起爆剤となり、キング牧師率いるモンゴメリー改善協会が結成されて運動は始まった。1954年にはブラウン判決も出て運動のさらなる加

速を促し、1960年代初頭には何万人もの学生が参加するフリーダムライダーや座り込み運動が組織された。この時にはすでに公民権運動は大衆運動としての性格を帯びており、それが絶頂を迎える1964年のミシシッピフリーダムサマーの頃には、運動の主要な支持層が白人中間層の学生となっていた（Levitt, 1984: 28）。

1964年に公民権運動が一応の収束を見ると、次はバークレーフリースピーチムーブメント（FSM）がニューレフト運動の中心となった。FSMは学生たちがキャンパスで政治的発言をする自由を訴えた運動であり、同時に学生の声と学生の掲げる理想を大学の運営に、さらには社会全般に反映させることを目的とした動きであった。この動きをもってアメリカでのニューレフト運動がポピュリズム運動としての色を濃くしていったことがうかがえる。全国のみならず全世界に広まったFSMは学生同士の連帯感を強め、抑圧的な社会に対抗する「人民」としての意識を強めた。さらに、「人民」は大学という既存の体制を批判し、大学での直接民主的改革、つまり大学内での学生の自治と大学の民主的な運営を求めた。また、生徒たちは独自の対抗文化を形成し、ビートニクスと呼ばれるような若者やヒッピーと呼ばれるカウンターカルチャー勢力もこの運動を支持した。これらの若者はベトナム反戦運動の際にも大きく活躍した（Levitt, 1984: 29）。こうした文化の形成は幅広い生徒を巻き込み、体制批判の一大大衆運動であるニューレフト運動を発展させた。

このとき成立したカウンターカルチャーの中で主翼を担ったのはヒッピーと呼ばれる人たちだった。ヒッピーは大半が白人からなる若者の集団であり、彼らはアメリカの黒人コミュニティの文化を取り入れ、それにビートジェネレーション（50年代のアメリカで活躍した作家集団）の反体制の価値観やその他の新左翼的価値観を融合した独自の文化を作り出した。この時、ヒッピーの間で被抑圧階級の民族の衣装を真似したり、文化を模倣したりする「カルチュラル・アプロプリエーション」という動きもあった。

また、白人を中心に展開されたニューレフト運動は、同時期に活躍した革命志向の黒人権利団体であった「ブラック・パンサー」をはじめとするブラックラディカリズムの影響を色濃く受け、このような運動を支持した。この時期には黒人のみならずアメリカ先住民、ラテン系住民、さらに後期には女性の地位向上運動も展開され、ニューレフト運動はこれらの運動を支持することで広範な草の根運動を目指した（McMillan and Buhle, 2003: 4）。

ニューレフト運動のこういった側面はニューレフトの措定する「人民」が表面上は社会的少数者や弱者を中心に据えていることを強調している。これは、後に見る「文化的反発」（Norris and Inglehart, 2016）としてのニューレフト運動を理解する上で重要である。つまり、ニューレフト運動の主翼を担った特権層の学生は、自分の属している社会集団の地位の低下から浮上する不安を逃れる為に自集団を批判する勢力（アメリカの例でいうと黒人などの少数民族や女性といった社会的弱者）に加わり、自分も属している特権層を批判したのである。特権層の学生がこのような行動を取る理由になった具体的なメカニズムである「文化的反発説」は第3節で詳しく論じる。

アメリカのニューレフト運動がいつ終息を迎えたのかは意見が割れるところであるが、1968 年を機に下火になったのは確かである。この年は世界中でニューレフトが最後の盛り上がりを見せた年であり、テト攻勢、北爆、コロンビア大学での蜂起、プラハの春とソ連のチェコスロヴァキア侵略、フランスの 5 月革命などが起こった。また、アメリカ国内ではマーク・ラッド、ジェリー・ルービン等のカリスマ指導者が注目を浴びた年でもあり、ヒッピーを中心としたカウンターカルチャーが爆発的に広まった。ニューレフトが暴力に転じたのも同年であり、以後ニューレフト運動は衰退していった。

アメリカのニューレフト運動の展開にはニューレフトのポピュリズムとしての性格が色濃く出ている。公民権運動から始まり、FSM へと継承された「被差別階級」の味方としての姿勢や、人民の立場からの特権階級や既存の社会体制への痛烈な批判は「下」が「上」を批判するポピュリズムの構図そのものである。また、この時に発生したカウンターカルチャーで白人中流階級の学生が積極的に社会的少数派の文化を吸収して社会的弱者の文化を流行させた姿勢には、被抑圧階級への同化と帰属意識の強化が観察される。これは中産階級の学生が新たに措定した「人民」へ傾倒し、その「人民」の声を政治や社会の表舞台へ直接反映させようとした結果である。つまり、これらの事実はアメリカの学生の運動がポピュリズム運動としての特徴を持っており、アメリカで展開されたニューレフト運動がポピュリズム運動として発展していったことを意味している。

3. 「文化的反発説」と左右ポピュリズムの共通性

アメリカの政治学者のピッパ・ノリスとロナルド・イングルハートは近年の右翼ポピュリズムの台頭を説明するために「文化的反発説」を提起した（Norris and Inglehart, 2016）。この説によると、ポピュリズムというのは主に社会心理学的な現象として説明できる。昔の特権階級・支配階級に属していた人間が、世界の価値観が進歩的になるにつれて自らの社会的地位と古い価値観を脅かされ、反発するのである。この時、反発者は「古き良き時代」への回帰を謳い、過去の栄光を懐古的に振り返る。そして、至上主義や排外主義を掲げることで自らの属する社会集団を昔の高い地位まで回復しようと試みるのである（Norris and Inglehart, 2016 : 14-16）。

アメリカでは、過去に圧倒的な特権と高い社会的地位を誇っていた白人の立場が近年弱くなってきている。白人系アメリカ人の人口が急速に減っているのに対し、非白人系アメリカ人の人口は増加の一途をたどっており、米国国勢調査局は 2050 年には白人は多数派ではなくなっているという見通しを立てている（Colby and Ortman, 2015）。また、世論の流れも決して白人に芳しくない。世界中で旧支配層である白人男性に対する批判の声があがっており、アフーマティブアクションやクォータ制の導入により、これまで白人の有していた特権を撤廃しようという動きが広がっている。社会の中での主導的な地位と多くの特権が失われていくのを感じ

る白人の中高年層、また低所得で低学歴の白人の若者層³は大きな不安を抱える。ピッパ・ノリスとロナルド・イングルハートはこのような不安に陥った個人が、自集団に批判的な勢力に反発して自集団の優越性を主張し、排外主義的主張を展開して他集団を批判する現象こそが右翼ポピュリズムであると説明するのである（Norris and Inglehart, 2016: 30）。

関連する学説を振り返ると、アメリカの精神分析学者であるエーリッヒ・フロムはポピュリズムという語句は使用していないが似たような主張を展開している。彼によると、社会の中で低い地位にあり、不安を感じる個人は強い集団に属することで安心感を覚え、その集団の集合的な性格や集団の持っている栄光を自己のものとして継承することでナルチスティックな満足感を得る（フロム、1965: 99）。また、このようにして形成された集団は外部集団からの攻撃に対して激しく反撃し、外部集団を攻撃して自集団の優位を訴える（同前: 99-112）。以上から、ノリスとイングルハート、フロムに即して考えると、近年台頭した右翼ポピュリズムは、社会的な地位の低下を見た旧支配層が低下する地位により生じた不安を解消するために集団（水島のいう「人民」）を形成し、外部集団を攻撃して自集団の優位を主張する中で生まれたと解釈できる。これが「文化的反発説」が提唱する右翼ポピュリズムの根源である。

実際、ノリスとイングルハートは、右翼ポピュリズムを促進した不安は、それこそ 1960-70 年代のニューレフト運動の流行により広まった脱物質主義的価値観に起因すると見ている（Norris and Inglehart, 2016: 20-22）。世界が近代化するに連れて、特に社会的な問題（少数者の権利問題など）に関して、脱物質主義的な価値を重視する姿勢を取る者が、特に若者と学歴の高い中間層の間で増えている（Norris and Inglehart, 2016: 14）。このような世論の流れは脱植民地主義、反帝国主義の流れを汲み、「強いアメリカ」のイメージを否定するとともに、白人にたいして厳しい批判の目を向ける。

こうした世論の傾向は今の時代も残っており、ニューレフトの思想的影響を強く受ける現在の左翼では、「アイデンティティ・ポリティクス」と呼ばれる、被抑圧者の側から抑圧者である白人男性を強く批判する政治手法が取られることがある。ポピュリズム政党やポピュリズム政治家が頻繁に攻撃する「ポリティカル・コレクトネス」も、ニューレフト運動の際に定められた人種、性的少数者に対する配慮といったルールを多く含み、そこにはやはりストレート（性的少数者ではない）な白人男性を抑圧者、それ以外を被抑圧者とみなす暗黙の意識が存在する。このような反支配層の姿勢が支配層の反発を招き、右翼ポピュリズムの発生の理由となったと考えられる。

筆者がここで示したいのは、右翼ポピュリズムのみならずニューレフト運動の左翼ポピュリズムの発生も「文化的反発説」により説明できることである。右翼ポピ

³ これらの若者は直接的には自らの属する社会集団が以前占めていた優遇的地位を感じ、その恩恵を受けたことがなくとも、中高年世代が流布する「古き良き時代」の話を聞き、ナショナリズムの主張に耳を傾けることで自分の集団の過去の栄光を認識する。

ユリズムと左翼ポピュリズムはともに文化的反発として生まれたのであり、異なる点はその集団、つまり「人民」の編成である。

ニューレフト運動の主な支持層となったのは白人の中間層の若者であったというのは先述した通りである。この当時に文化的な多数派を形成していたのは伝統的な価値観を持っていた中高年の白人男性であった（Norris and Inglehart, 2016: 5）。しかし、同時にこの時期はこれら支配層の権力の正統性に疑問を投げかけるような思想の潮流が始まっており、ニューレフトの台頭でその潮流は絶頂に達した。米ソの対立で世界が分断していたこの時代は、資本主義や帝国主義に批判的なマルクス主義の思想が、特に左翼知識人の間で影響力を持っていた。戦中から戦後にかけて批判哲学を展開したフランクフルト学派の学者もこのころ、多くが活動の拠点をアメリカにおいて資本主義批判や帝国主義批判、権力批判を展開しており、当時の思想や萌芽するニューレフトの運動に多大な影響を与えた（Fromm, 1961；Marcuse, 1964）。

さらに、ポストモダニズムの前身となる懐疑的で批判的な思想もこの時に多く登場し、フランク・ファノンに代表されるような脱植民地主義も勢いを持った。この時代には、特に知識人層を中心とした人々の目には白人などの旧支配層の凋落が始まっていた。アメリカでは公民権運動、フランスではアルジェリア戦争、イギリスではスエズ出兵を機に人種差別や帝国主義、植民地主義を非難する声が強まったのが旧支配層の凋落の契機となった（大嶽、2007：230, 240）。

これと相まって進行したのが、既成左翼の没落である。第1節で述べたように、1950年代末までには先進国間で豊かな社会が資本主義体制の下で到来し、大多数の労働者の生活が安定して物質的な充足を迎えた。そのため、福祉の拡充と労働者中心の生活向上を唱えていた既成左翼への応援が弱まった。加えて、東欧の社会主義、共産主義国家の政治的抑圧と人権侵害が明らかとなり、世論は既成左翼に対して批判的な姿勢を強めた。

教養のあった左派思想の白人中間層学生にとって、このような旧支配層や既成左翼に対する批判的な声の強まりは彼らの属する社会集団の凋落と彼ら自身の社会的地位の低下を明らかにした。これに対して学生のとった反応は「文化的反発」であった。しかし、大学というコスモポリタンの価値観の強い環境にいた当時の学生にとってナショナリズムへの傾倒は選択肢とはならなかった。代わりに、学生たちは自分たちの属する特権階級や抑圧的な社会、さらには既成左翼を痛烈に批判し、新たな集団（ポピュリズムでいう「人民」）を編成してそこに所属を移したのである。フロムは不安を感じる個人は安心感を求めて自分より強い集団に属すると言った（フロム、1965: 99）が、この時の学生たちも自分たちの従来属していた集団（特権層）の社会的な位置が低下していったことに不安を感じており、それを解消する為に不安の種となっていた集団から自分を切り離し、反対に社会的地位を向上させていた被抑圧者や少数者の集団に加わったのである。つまり、自集団の社会的な地位の低下に起因する不安を解消する為に自集団を捨て、代わりにそれを批判する集団に加わることでポピュリズム的な「人民」を形成したのである。

ここで、現代の右翼ポピュリズムとニューレフトの左翼ポピュリズムを比較してみる。右翼ポピュリズムでは人々が自分の属する集団の社会的地位の低下に不安を抱え、その集団への帰属意識を強めて他の集団を攻撃し、自集団の優位を主張する。つまり、右翼ポピュリズムにおける「人民」は最初から一貫して自分の属していた社会集団なのである。対して、ニューレフトの左翼ポピュリズムでは自分の属する社会集団の社会的地位の低下に不安を抱いた人々が、逆に自分の集団を批判してそこから離れ、外部集団の味方に入って新たな集団を作る。つまり、ニューレフトのポピュリズムにおける「人民」は自分の社会集団ではなく、それを批判する諸集団を言う。そのため、ニューレフトのポピュリストは自分の社会集団を批判する外部集団に加わることで批判を逃れ、そこに自分の属する新たな「人民」を見出し、帰属意識⁴を強めて安定を図るのである。

以上のことから、現代アメリカに代表されるような右翼ポピュリズムもニューレフト運動の左翼ポピュリズムも「文化的反発」の結果として説明できることが示された。前者では自分が所属する集団以外の外部集団へ反発して自集団の優位を主張するが、後者では自分が所属する集団へ反発して他の集団に加わり、それを新たな自分の集団として自集団の優位性を主張するのである。

おわりに

以上、ニューレフト運動が左翼のポピュリズム運動であったことを示し、さらにその根源が現代の右翼ポピュリズムと同様で「文化的反発」にあることを確認した。

ここで、視点を現代アメリカの左翼に移す。現在のアメリカの左翼には、「アイデンティティ・ポリティクス」という政治手法を展開するものがあるが、これにはなぜか中間層の白人が多いように思える⁵。「アイデンティティ・ポリティクス」を展開して特権層を激しく攻撃する行動は、特に特権層が行うと、文化的反発による左翼ポピュリズムである疑いが強い。つまり、現在のアメリカの左右の対立は、特に双方が両極に位置するような時は、ポピュリズムとポピュリズムの対立になっていることが多いのである。このような対立では、お互いに属する集団への帰属意識が強く、自集団に対立する相手集団への敵意と攻撃をそのイデオロギーの中心に置いている。そのため、両者の譲り合いや協議が困難になっており、政治的分裂を深化させるのみで少しも建設的な討議を生み出さない。

⁴ ここに見られるような外部集団への同化意識は、ヒッピー運動の頃に盛んとなった「カルチュラル・アプロプリエーション」に体现される。「カルチュラル・アプロプリエーション」とは、白人が主に社会的少数者の装束などの文化を取り入れ、それを自分のものとすることを意味する。「カルチュラル・アプロプリエーション」は、ヒッピー等の白人が少数者の味方であることを強調しており、被抑圧者や抑圧者への対抗勢力が統一的に形成する「人民」への組み入れを強く望んでいることを示している。

⁵ この点に関しては統計的なデータが集められていないので正確にそうであるとは言えないが、アイデンティティポリティクスを展開する白人は多くいる。

こういった事情を踏まえると、左右の両側で旧支配層の社会的地位の低下に対して「文化的反発」をするのではなく、低下する社会的地位を受け入れ、それを含めて集団のアイデンティティを改めて考えていく必要がある。こうして初めて「文化的反発」のきっかけとなるような社会的地位の低下により浮上する不安を解消できるようになるであろう。

右翼のポピュリズムはこれまで幾度となく議論されてきた。しかし、左翼の側にも同じようなポピュリズムが働いており、それが建設的な協議の妨げとなっていることは、そこまでは注目されてきていない。なぜなら、そもそも多様性を尊重する左翼のイデオロギーでもポピュリズムに特徴的な集団への帰属意識と他集団への攻撃的姿勢が芽生えることが可能であるとあまり考えられてこなかったためであろう。しかし、左翼の側にもポピュリズムが潜んでいるのが現実である。この先、左右両翼の間で建設的な協議を可能とするためには、右翼ポピュリズムのみならず、左翼ポピュリズムも超克することが必要であろう。この論文は、その第一歩として左翼ポピュリズムの認識を促すことを意図して書かれた。本論文を読むことが、左翼の側にあるポピュリズムを認識することに少しでも資することができたら幸いである。

参考文献：

- Barker, Collin, 2008, "Some Reflections on Student Movements of the 1960s and Early 1970s" in *Revista Crítica de Ciências Sociais*, 81, Junho 2008: 43-91.
- Colby, Sandra L. and Jennifer M. Ortman, 2015, *Projections of the Size and Composition of the U.S. Population: 2014 to 2060*, United States Census Bureau.
- Conlin, J. 1982, *The Troubles: A Jaundiced Glance Back at the Movement of the Sixties*, New York, London, Toronto, Sydney: Franklin Watts.
- Dahlberg, Lincoln, 2012, "Radical Democracy" in Stephen Stockwell, Benjamin Isakhan eds., *The Edinburgh Companion to the History of Democracy*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 491-501.
- Debord, Guy, 1967, *The Society of the Spectacle*, New York: Zone Books.
- Fromm, Erich, 1961, *Marx's Concept of Man*, New York: Frederick Ungar Publishing Co.
- Ignazi, Piero, 1992, "The silent counter-revolution: Hypotheses on the emergence of extreme right-wing parties in Europe" in *European Journal of Political Research*, Dordrecht: Kluwer, Vol. 22, Issue 1, pp. 3-34.
- Inglehart, Ronald F., 1977, *The Silent Revolution: Changing Values and Political Styles Among Western Publics*, Princeton: Princeton University Press.
- Kaczynski, Theodore J., 1995, *The Unabomber Manifesto: Industrial Society and Its Future*, Berkeley, CA: Jolly Roger Press.
- Kenny, Michael, 1995, *The First New Left: British Intellectuals After Stalin*, London: Lawrence & Wishart.
- Levitt, Cyril, 1984, *Children of Privilege: Student Revolt in the Sixties*, Toronto: University of Toronto Press.
- Lynd, Staughton, 1969, "The New Left" in Priscilla Long eds., *The New Left: A Collection of Essays*, Boston: Extending Horizons Books/Porter Sargent, pp. 64-72.
- Mankoff, Milton and Richard Flacks, 1971, "The Changing Social Base of the American Student Movement" in Richard D. Lambert eds., *The ANNALS of the American*

- Academy of Political and Social Science*, New York: Sage Publications, Vol. 395, Issue 1, pp. 54-67.
- Marcuse, Herbert, 1964, *One Dimensional Man*, Boston: Beacon Press.
- McMillan, John and Paul Buhle, 2003, *New Left Revisited (Critical Perspectives on the P)*, Philadelphia: Temple University Press.
- Mills, C. Wright, 1956, *The Power Elite*, Oxford: Oxford University Press.
- Mills, C. Wright, 1960, "Letter to the New Left" in Stuart Hall eds., *New Left Review*, London: New Left Review, no. 5.
- Norris, Pippa and Ronald F. Inglehart, 2016, "Trump, Brexit, and the Rise of Populism: Economic have-nots and cultural backlash" (RWP16-026). Retrieved from HKS Faculty Research Working Paper Series, June 17, 2019. Harvard Kennedy School.
- Norris, Pippa and Ronald F. Inglehart, 2019, *Cultural Backlash: Trump, Brexit, and Authoritarian Populism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Thompson, E.P., 1959, "The New Left," *The New Reasoner*, whole no. 9, pp. 1-17.

- 大嶽秀夫 2007『新左翼の遺産』東京大学出版会
- フロム、エーリッヒ（日高六郎訳）1952『自由からの逃走』東京創元社
- フロム、エーリッヒ（鈴木重吉訳）1965『悪について』紀伊國屋書店
- ホーン川嶋瑤子 2018『アメリカの社会変革—人種・移民・ジェンダー・LGBT』ちくま新書
- 水島治郎 2016『ポピュリズムとは何か—民主主義の敵か、改革の希望か』中公新書
- リンドベック、A.（八木甫訳）1973『ラディカル・エコノミクスの展開』日本経済新聞社
- 久米郁男、川出良枝、古城佳子、田中愛治、真淵勝 2011『補訂版政治学』有斐閣